

タイトル	つながろう！タンザニア		
名前	伊藤 直美		
学校名	吹田市立西山田中学校		
担当教科	英語		
実践教科	英語・総合	時間数	11時間×5クラス
対象学年	1年生	対象人数	174人

カリキュラム案

(1) 実践の目的

- ・タンザニアについて知り、日本との違いについて考えることで異文化理解を深める。
- ・開発途上国から来日している JICA 技術研修員の方々ととの交流を通して、その国の現状について知るとともに、お互いの文化の良さを認め合う。
- ・世界で起きている様々な問題を知り、全ての人たちが幸せに暮らせるようになるために、「自分たちが今できること」について考える。

(2) 授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1限目 タンザニアってどんな国だろう ねらい：タンザニアに興味を持つ	① google earth でタンザニアの位置を確認する ②タンザニアの基礎知識を得る ③タンザニアの子どもたちに手紙を書く ④タンザニアの子どもたちに向けてのビデオレターを作成する ⑤アンケートに答える	google earth タンザニアの写真
2限目 タンザニアの子どもたち ねらい：ビデオや手紙などからタンザニアとつながっていることを意識させる	①マサシデイセカンダリースクールの1日を紹介する ②タンザニアの中学生から日本の中学生に向けてのメッセージビデオを紹介する ③日本の中学生とタンザニアの中学生のアンケート結果の違いを比較する ④タンザニアの中学生たちから送られてきた手紙を紹介する	パワーポイント ビデオレター タンザニアからの手紙
3限目 タンザニアの人々の暮らし ねらい：タンザニアの人々の暮らしを通して、今世界で起きていることに気づく	①タンザニアの人々の生活について知る ②水の大切さについて知る ③ JICA DVD「世界はきみにつながっている」を鑑賞する	タンザニアの写真 物品など

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
4～5 限目 今、自分たちが出来ること ねらい：世界で起きている様々な問題を知り、全ての人々が幸せに暮らせるようになるために、今自分たちができることについて考える	JICA の開発教育教材を読み、それぞれの問題に対して、自分たちが考えたことをワークシートにまとめる	JICA 開発教育教材 5冊 ワークシート
6～7 限目 研修員交流に向けて ねらい：1月に行う JICA 技術研修員の方々との交流に向けての準備を行う	①研修員の方々の出身国について調べ学習を行う ②各班ごとに紹介する日本文化の練習を行う	
8～9 限目 研修員交流 ねらい：交流を通して開発途上国の現状を知る またお互いの文化の良さを認め合う	①研修員の方々の出身国について知る ②日本文化を研修員の方々に紹介する	地図世界 日本文化紹介のためのグッズ
10 限目 研修員交流のまとめ ねらい：研修員交流によって知った開発途上国の現状やその国の文化を振り返る	研修員交流での感想を各クラスで話し合い、感想文にまとめる	
11 限目 タンザニア～研修員交流に至るまで ねらい：今後も世界で起きている様々な問題に興味関心を持っていくことの必要性を各自が認識する	1 学期から始めた国際理解教育および開発教育の取り組み全体をふりかえり、各自が感じたことを発表し、全体で共有する	地図世界 日本文化紹介のためのグッズ

実践授業の詳細

< 1 限目 >

2 学期に行うタンザニアの海外研修報告を生徒たちに楽しみにしてもらえるように工夫した。英語の時間に撮影した生徒たちの「自己紹介ビデオ」を、タンザニアの子どもたちに見せ、タンザニアの子どもたちからのメッセージもビデオに撮って帰り、2 学期にみんなに見せたい、と生徒たちに伝えた。また生徒たちに3つのアンケート「将来の夢は?」「今一番ほしいものは?」「タンザニア、と聞いて思い浮かぶものは?」に答えてもらい、タンザニアの子どもたちにも同じ質問に答えてもらってくる、と約束した。タンザニアの子どもたちに向けてお手紙を書いてくれる生徒もいた。

< 2 限目 >

ムトワラ州にある、マサシデイセカンダリースクールの子どものたちの学校生活を中心に授業

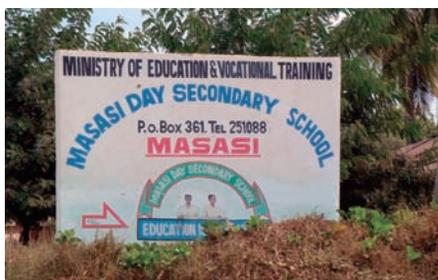
を行った。「ひとコマ40分の授業が毎日9時間あり、昼食時以外は休憩なし」という日課表を見て生徒たちはとても驚いていた。マサシの中学生たちから日本の生徒たちに向けてのメッセージビデオを見せると、「私たちより英語がうまいな〜」などと言いながら熱心に見ていた。またタンザニア研修前に本校の生徒たちが書いてくれた29通のお手紙に対して、マサシセカンダリースクールの生徒たちが29通の返事を書いてくれ、9月の終わりに現地の協力隊の方がそれを送ってくださった。生徒たちにその手紙を渡すと、とても喜んで、「タンザニアの中学生とのつながり」を感じることでできる授業になったと思う。

タンザニアの中学校の日

7:15	出欠確認
7:20~7:40(20分)	各自の分組場所を掃除
7:40~7:50(10分)	朝礼(月曜だけ国歌・校歌)
7:50~8:30(40分)	1時間目
8:30~9:10(40分)	2時間目
9:10~9:50(40分)	3時間目
9:50~10:30(40分)	4時間目
10:30~11:10(40分)	5時間目
11:10~11:40(30分)	チャイの時間 (購読でピスト・水・ジュース)
11:40~12:20(40分)	6時間目
12:20~1:00(40分)	7時間目
1:00~1:40(40分)	8時間目
1:40~2:20(40分)	9時間目
	放課後 英語ディベート・サッカー・ ネットボール・掃除など (日によって学校・水や薪を 持ってくる・ピストをやる)

生徒の感想

- タンザニアは自分が思っていた所と全然ちがった。
- 今日の授業で私は、タンザニアの人は日本人にはないものを持っていると思いました。それは笑顔だと思いました。みんなすごく笑顔でした。
- ぼくが思っていたより、みんな元気ですごく笑顔でなんか楽しそうでした。行ってみたいです。
- タンザニアの子どもたちの写真を見てタンザニアの印象が大きく変わりました。私は教育を十分受けれているので、授業を大切にしようと思います。
- タンザニアの子どもたちも私たちと同じで英語を勉強しているんだな〜と思いました。タンザニアから来た手紙はとてもきれいでした。



①学校の標識



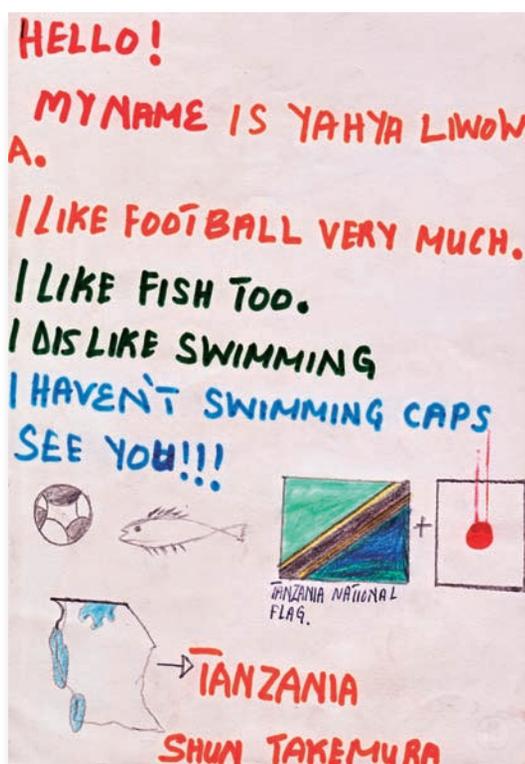
②マサシの生徒たち



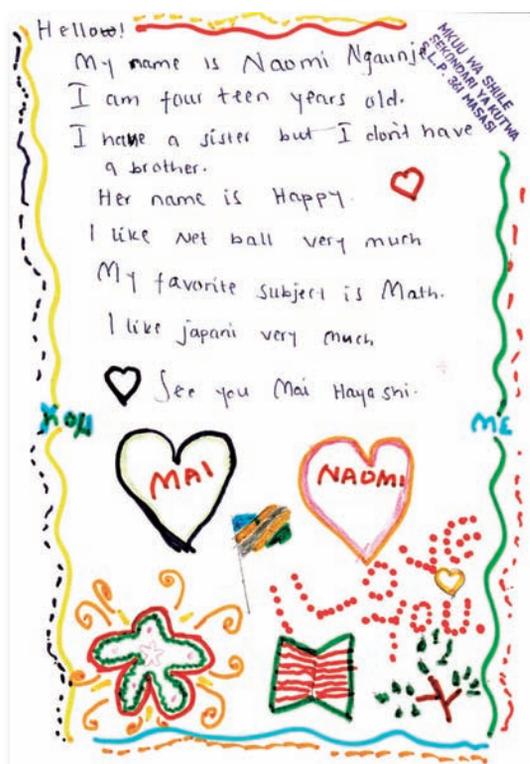
③習字を教える



④日本の生徒へのメッセージビデオ



⑤タンザニアから届いた手紙 (1)



⑥タンザニアから届いた手紙 (2)

< 3 限目 >

タンザニアで撮った写真や様々なグッズを使ってタンザニアの人々の生活を紹介した。特に水の大切さについてはくわしく触れたかったので、2学期の校外学習で訪れた国立民俗学博物館に展示されていたポリタンクの写真を見せたり、現地の協力隊員の方が送ってくださった「にごった生活用水」の写真を見せたりして、タンザニアでは水がどれほど貴重であるかを生徒たちに実感してもらえるよう工夫した。その後、JICAのDVD「世界はきみにつながっている」を鑑賞し、開発途上国で今起きている様々な問題と先進国で暮らす自分たちの生活は密接なつながりを持っていることを生徒たちに気づいてもらうようにした。



生徒の感想

- タンザニアの人たちはにごった水をふつうに使っていることを知ってびっくりしたし、かわいそうに思った。水の無駄遣いをしてはいけないと思った。
- 日本の子どもたちは当たり前のように学校に行き勉強しているけど、タンザニアの子どもたちの中には学校に行けない子もいると聞いて、私たちはもっとがんばらないといけないと思った。
- JICA に入って国際協力にたずさわる活動をしてみたいです。



⑦国立民俗学博物館展示のポリタンク



⑧にごった生活用水

< 4 限目・5 限目 >

JICA 大阪から送っていただいた 5 冊の開発教育教材「学校に行けない世界の子どもたち」「世界の水問題」「砂漠化する惑星」「世界の食料」「いのち、輝け！」を全員が読み、用意したワークシートに冊子の要点や各自が感じたことをまとめた。タンザニアの人々の様子を授業で学習した後だったので、生徒たちは冊子に書かれている内容をより真剣に受け止めることができていた。

< 8 限目・9 限目 >

1 月 19 日（木）の午後 2 時間（総合的な学習の時間）を使い、開発途上国から来日されている JICA 技術研修員 11 名の方々（バングラデシュ、ブータン、カンボジア、インドネシア、ラオス、ネパール、フィリピン出身の方々）と中学生たちとの研修員交流を予定している。交流は各クラスごとに行い、それぞれのクラスに研修員の方 2～3 名が入ってくださることになっている。2 時間の交流のうち 1 時間はそれぞれの国の様子をお聞きし、もう 1 時間は生徒たちが各班に分かれて、日本文化（はし、お手玉、けん玉、はねつき、節分、習字）を紹介することになっている。研修員の方々との交流は平成 20 年度と 21 年度にも本校で行っており、開発途上国から来られている方々と直接ふれ合うという貴重な体験は、生徒たちの将来に大きな影響を与えるだろうと思われる。実りある交流となるよう、準備を万全に進めていきたいと考えている。



⑨平成 21 年度の研修員交流 (1)



⑩平成 21 年度の研修員交流 (2)

実践授業を通しての所感・反省と今後の展望

私自身が今回タンザニアを訪れて、タンザニアの人々は様々な困難をかかえているが、それに負けないくらい大きなエネルギーを持っていることを知った。生徒たちにもそれを知ってほしいと願いつつ、実践授業にのぞんできた。

実践授業を行う前は、タンザニアに対してマイナスイメージを多く持っていた生徒たちが「タンザニアに行ってみたい」と思ってくれるようになったことが今回一番うれしかったことだった。

またビデオレターやタンザニアからの手紙を使って、「遠い国だけれどつながっている」ということを生徒たちに意識させることができたのは、とてもよかったと思う。このようなつながりを意識させることができたのも、現地で活躍されている協力隊員の方々の協力があっただけなので、協力隊の方々には本当に感謝している。マサシデイセカンダリースクールの生徒たちとの文通は、今後も可能な限り続けていきたいと考えている。

今回は授業時間の関係上、フォトランゲージや貿易ゲームなどの活動を行うことができなかったため、今後はそれらの活動も取り入れながら、生徒たちが引き続き、開発途上国の現状に興味をもってくれるような授業を行っていきたいと考えている。

実践授業を行った直後の感想に、「将来、青年海外協力隊や JICA のスタッフとして働きたい」と書いていた生徒が数名いた。このような生徒たちがこれからもより多く育っていってくれるよう、私自身がこれからも開発教育により深くたずさわっていきたいと考えている。